

「動員史觀」の冒険：二一世紀型社会科学への構想

畠山弘文『動員史觀へのご招待——絶対主義から援助交際まで——』

五絃舎, 2002 年刊を読んで

大平浩二

はじめに

動員史觀とは聞きなれない言葉かもしれないが、著者の畠山氏の造語である。氏は長年、比較的限られた場所で、つまり地域の講演会、学会の報告、小規模の研究会、場合によっては談話によって、また当然ながら論文や一般向けのエッセイなどを通じても、動員史觀という新しい学問的視点（といわなければまったく斬新な近代史再解釈の試み）の存在を仄めかしてきた。その期間が比較的長かったので、本書によって、その全貌がようやく公になったことを、まずは慶賀したい。そして、副題にあるような「ご招待」という導入的ではあるけれども、動員史觀の大要が公表されたこの機会に、本書の紹介とともに少し検討を加えることとした。そうすることで二一世紀における社会科学のあり方を考えるきっかけを得たいと思う。

もともと氏は政治学者である。その意味ではわれわれ経済や経営を専門とする人間には直接の関係はない。方法的、対象的に経済学や経営学に接近しているというわけでもない。しかし動員史觀は、その二段組のボリュームある体系的な本書によって、これまでの社会科学のあり方を根底的に

批判し、二一世紀型社会科学への展望を打ち出す試みをしている。その主張はわれわれ社会科学の一員としてはどうしても見逃すことのできないものである。のみならず、氏は、従来の社会科学が経済的説明を中心にしていることが社会科学と近代的現実の不整合をきたす主たる要因だとも論じており、これは要するに《もう一つの経済学批判》であり、動員史觀とは、社会科学のモデルとして霸権を担ってきた経済学的思考に対する直接攻撃といってよい決定的な面がある。この意味で評者は、一昨年（2001 年）の 9 月に関西大学で開催された、経営哲学学会第 18 回全国大会において、著者を報告者として推薦し、経営学者の前で、彼の動員史觀を紹介してもらったことがある。限られた時間ゆえ、誤解や驚愕もあったようであるが、また一方で新鮮な感覚を聴衆に与えたようである。

こうしてわれわれの学的アイデンティティにこの動員史觀は様々な形で切り込んでくる。多様な読み方が可能だと思われるが、書評はこのような文脈において行われる。すなわち、いわゆる経済学的な発想による古典的社会科学（批判）という氏の見方は、全体としてどう評価すべきものなのか。また、動員史觀は社会科学の再構築につなが

り得る展望を含むものなのか。産声をあげたばかりの動員史観の説明や紹介を当然含むとしても、これらの問い合わせに必要な点を中心に極力著者の文脈に沿いながら以下では考えていきたい。

1 一九世紀型社会科学から 二一世紀型社会科学へ

はじめから要点に入るのがよいだろう。動員史観の「根本的なねらい」を簡略に説明してみたい。

氏によれば、動員史観は関連する現象解明に役立つアプローチであるとともに、一種のメタアプローチでもある。つまり動員史観は、一個の学問論をそのベースにしている。それが「一九世紀型社会科学批判」であり、それを通じて「二一世紀型社会科学」のあり方を考えていこうとする。この学問論はさらに、現実的な時代批判と結びついている。いいかえると、動員史観のめざす認識は、歴史の最前線とそれまでの軌跡全体を批判的に対象化するような性格のものになっている。以上を一口にいうと、氏の動員史観は二一世紀型社会科学の構想であり、それは「近代社会批判」と「近代社会科学批判」を同時に遂行しうるものとして構成されているのである。「一九世紀型社会科学から二一世紀型社会科学へ」がそのスローガンだといってよいだろう。

それでは一九世紀型社会科学とはどのようなものであろうか。氏によれば、それは社会科学自体を「歴史化」すべくつくられた概念で、一九世紀にヨーロッパにおいて制度化されてくる社会科学という制度や営為が、当然のことながらその時代の歴史的被規定性をもって生まれ、その後も、その被規定性の長い腕から逃れられない、ということを意味したものである。それまで衰退の一途をたどってきた大学を復活させ制度的拠点をえた新

生児社会科学は、啓蒙主義を経て近代科学が誕生した一九世紀という、近代のなかでもある特殊な時代経験の刻印を色濃く受け継ぐことになった。にもかかわらず、そのことは、当時は充分に自覚されることはなかった。それは、時代の先端的真理としての社会科学という自然科学とアナロジカルな「科学性の神話」が存在するからである。社会科学に時代性があるとしたら、それは当該時代の知的探求の限界であって、自然科学がそうであるように、累積的な真理の発見という道程における最先端の限界である、と理解されていたわけである。これこそ社会科学的なものの見方とは異質だといえようが、事実はそれほど奇異なことは受け止められてこなかったようにみえる。

ところが動員史観においては、社会科学の歴史性や限界というのは、そういう意味ではない。一九世紀的発想における時代的限界がその限界であり、一九世紀近代社会の歴史的性格が、あるいは近代にいたるヨーロッパの道程そのもの、そのもつ特殊性が、普遍科学をめざす社会科学そのものの成り立ちと性格の歴史性を生むのである。

ただし氏によれば、現実には大学の一九世紀型社会科学が制度的に充実するのは第二次大戦後である。またその代表者たちとされる顔ぶれも、ウェーバーやデュルケム、ジンメルといった世紀転換点で活躍した人々である以上は、一九世紀型社会科学とはすぐれて二〇世紀的な社会科学というべきである。にもかかわらず、一九世紀型社会科学とそこで呼ばれるのは、その母体となる思想的範型が一九世紀に与えられたからに他ならない。したがって二〇世紀型社会科学という概念は動員史観ではなく、それは一九世紀型社会科学に包摂されている。動員史観は、「The 社会科学」という「歴史をこえた社会科学」観を否定し、むしろその没歴史性あるいは近代的同伴性こそ社会科学の

今日的混迷、すなわち現実理解の不徹底を招いているとみているのである。

もっともこうした氏の一九世紀型社会科学と二〇世紀的な社会科学の理解に対しては、いくたの異見があるだろう。例えはここには、社会科学に対しても大きな影響を与えた経験主義の系譜、たとえば論理実証主義や批判的合理主義そしてまたクーン等の見解については積極的には触れられてはいないからである。

それはそれとして、氏によると二一世紀型社会科学とは一九世紀型社会科学の歴史的被規定性をこえたところに成立するものということになるが、そのような二一世紀型社会科学の構想を理論的に整理して提示するときに、動員史觀では、一九世紀型社会科学が依拠していた思想的母体に即する形で以下のような説明を行う（これは構想化の過程を再現しているのでなく、構想それ自体を事後に説明するのに適当な形として採用されたものである）。

この大きな思想的母体なるものを、動員史觀は、社会思想に近く個々の社会学説（狭義の社会理論）からは遠い、ある思考の大きな型として捉え、さしあたっては広い意味での社会理論と呼び、そのような社会理論として一九世紀型社会科学は二つの社会理論しか知らなかったという言い方で要約していくのである。二つの社会理論とは、第一の社会理論＝自由主義的社会理論であり、第二の社会理論＝マルクス主義社会理論である（第一、第二は動員史觀の使う便宜上の言い方である）。

一九世紀全般の労働運動・階級闘争、二〇世紀の革命とイデオロギー的総力戦、また第二次大戦後の冷戦状況などを考えるとき、両者は、非常に敵対的な二つの思考のマトリクスだと考えていいし、実際そう見られてもきた。自由主義陣営対社会主義陣営の基本的対立は現実の国際政治のみならず、社会科学の常識でもあった。しかし動員史觀が興味深いのは、この二つが、いがみ合うけれども似たもの夫婦だとする点にある。つまり、自由主義社会理論もマルクス主義社会理論も、実は、同じ家庭のなかで離婚訴訟をずっと継続してきたかのような家族と捉えられているのである。だからそこには思考の違いでなく共通性を指摘できると氏は考えてたのであろう。

その両者の暮らす家庭の特徴を一言でいったのが、「一国史的・社会経済的アプローチ」というものである。これが、動員史觀の一九世紀型社会の科学規定となる。すなわち、自由主義もマルクス主義も、社会理論としては、国際関係への視点は比較的薄く、基本的に国民経済や国民文化のごとき一国内的な視点を強調するものであり、その一国内においては端的に社会経済（階級や技術を含む広義の意味での）を一個の自律的なメカニズムをもつものとみなしている。そして、その動態こそが歴史形成の主要因（driving force）だと考える。一九世紀型社会科学とはしたがって、国際関係と非社会経済的要因との軽視を特徴とするアプローチだということもできる。もちろんこれは特定の研究を詳細に批判するものでなく、一般に自由主義、マルクス主義という形で言及されてきた研究において同じように、相対的に、（額面上はあっても実際には理論的に十分表現された）国際的要因が弱く、非社会経済的要因（端的には政治的要因）が忘れられている、ということをいつているにすぎない。従って、例外はたくさんあるであろうし、氏としてもそれはそれで別に構わないのであろう。

ではこの軽視された国際的要因と政治的要因の意味するものは何であろうか。あるいはそれらが結びつくところに成立するものは何か。それは、動員史觀において、極力簡単にいえば、戦争であ

る。したがって動員史観の論難する、一九世紀型社会科学の上のような性格規定が正しいかどうかをみるには、一九世紀型社会科学の主要な領域において、戦争がどのように理論化されているかをみればよいということになる。その検討を行った結果、動員史観は、一九世紀型社会科学が、政治学でも社会学でも勿論経済学でも、戦争に対して、社会理論レベルにおいて、正当な理論的評価や位置づけを与えてこなかったと判定する。すなわちその理論的営為から、戦争という現象はオミットされており、多くの場合、戦争はまったく理論化されずじまいであったと結論しているのである。

確かにこの点は、最近ようやくわかってきたように、また流行だといってよいように、戦争を抜きに二〇世紀は語れないし、そもそも近代は戦争論なしでは理解できないといえる。戦争が質的量的に圧倒的な現象となるのは近代においてであるからである。そうだとすれば、ある意味この時代をもっとも特徴づける事態（＝戦争）への理論把握が欠落している諸社会理論が繰り出すような近代理解の枠組には、大きな欠落があるというべきだろう。この意味で、動員史観はわれわれの見落としに気づかせてくれたといえよう。

勿論、戦争論がないわけではない。動員史観の見るところ、原始時代から今日までの戦争を戦争一般として人間的本能や集団内・間の傾向の観点からみる戦争論は多数ある。戦史ものの本や雑誌の売れ行きは高いし、独自のコーナーが大衆的なチェーン書店にすら存在する。しかし動員史観で重要なのは近代戦争である。そう考えると近代戦争の特質に十分留意した戦争研究は圧倒的に少ないことがわかる。さらにいえば、国際政治学や国際関係論など戦争論を含む学問領域も厳然と存在する。憲法学や国際法のような法律分野、また歴史学でも戦争はとりあげられてきた。しかし動員

史観は、一九世紀型社会科学の中核をなす分野である経済学、法学、社会学、政治学などでは、戦争についてはほとんど理論化されることなく、むしろまったく見えなくなっていたというのが実相だというのである。戦争はその重大性にもかかわらず、どこか特定の分野に収まりきらず、収まつたとしても、社会理論の深みに立ち入って近代戦争の歴史形成上の意義を探求したものは、単発的にはあっても、一つの作法や流れにはなっていない。戦争への理論化の可能性をもっとも秘めたはずの国際関係論系統の議論でもそのことは否定できない。言われてみると、確かにその通りであろう。

このような近代戦争論議の理論的弱さは、結局、さまざまな理由はあるにせよ、動員史観においては、一九世紀型社会科学そのもののアプローチの特性によると考えられる。一国内で完結するメカニズムとして社会経済的なモデルを考えるこの一九世紀型社会科学固有のものの見方、すなわち一国史的な社会中心的アプローチでは、戦争や国家、あるいは端的に政治的なものを、偶発的なもの、派生的なもの、二次的なものとしかみない傾向がある。マルクス主義の国家死滅説はそうした議論の極限だとされるが、自由主義の「国家=必要悪説」も同様である。そもそも国家死滅説はハーバート・スペンサーのような社会学的自由主義者の議論をより徹底したものだといふのであれば、歴史形成力として一貫して政治、国家、国家システム、戦争、戦争準備のような、動員史観のいう「国家関連事項」を見ないでいこうとするところに、仲の悪い同居家族としての自由主義とマルクス主義、すなわち一九世紀型社会科学の思想的母体におけるその共通の限界があったというべきなのである。

こういう議論によって動員史観は、二一世紀型社会科学が歴史形成力としての国家関連事項の意

義を重視するものになるという。そういう新しい社会科学の思想的母体となる第三の社会理論を氏は「ネオ・マキアヴェリ主義社会理論」と呼んでいる。社会理論としてのネオ・マキアヴェリ主義は、これまで不当にも低い評価しか与えられてこなかった国家関連事項を視野の中心に置きながら、他の要因も排除することなく近代を再解釈し、現在のさまざまな問題に新たな光をあてようと唱導するものである。動員史観はその一例である。動員史観は、提唱された第三の社会理論を踏まえて多様に構成される可能的アプローチのうちの一つであり、氏自身の関心によって生まれたその具体例、実践例なのである。

2 動員史観とは何か

このような学問論的背景を踏まえた上で、目次に即して全体の成り立ちを紹介しながら、どういう具体的な主張を行っているかみていく。全体は三部構成。各部二章構成で、六章。それに序章と終章がついて、計八章からなる。体系だった構成なので、詳しく紹介すると以下のようになる。

序章 動員史観への長い助走

第一部 動員史観へのご招待——近代、よい子、動員

第一章 動員史観へのプレリュード

第一節 動員の産物としてのわれわれ？

第二節 一億総よい子化社会

第三節 動員の歴史社会学(1)

第四節 動員の歴史社会学(2)

第五節 孤独でデリケートな美学的抵抗

第二章 「動員後」へのスルーパス——一九九七年ジョホールバルからの展望（竹内瑞穂執筆）

編者（畠山）から一言

序 書くにあたって

第一節 スポーツ社会学の起点と広がり

第二節 動員史観で捉えるアジア最終予選

第三節 「動員後」にあるもの

最後に 「動員」解除への方向性

第二部 一九世紀型社会科学からネオ・マキアヴェリ主義的冒険へ

第三章 社会科学の古典モデル

第一節 一九世紀型社会科学

第二節 一九世紀型社会科学のバイアス——《社会中心的な一国史的アプローチ》

第三節 近代の新たな自己理解——二一世紀型社会科学への中間報告

第四章 日本におけるネオ・マキアヴェリ主義的精神の躍動——動員史観前史の試み

第一節 《怪物としての国民》の自覚——西川長夫

第二節 ネオ・マキアヴェリ主義的精神の《心の旅路》——山之内靖

第三節 二一世紀型社会科学への遺言——村上泰亮

第四節 ネオ・マキアヴェリ主義的精神の横溢——多島海への船出

第三部 第三の社会理論としての動員史観

第五章 動員史観の理論枠組

第一節 総力戦体制という出発点

第二節 動員史観の基本的なコンセプトと枠組

第三節 社会理論としての国家論1と社会理論としての国家論2——動員史観の理論的基礎づけ

第四節 フル動員としての近代生活——よい子の世界

第六章 よい子という問題構成——動員の考古

学

- 第一節 よい子の誕生と生態
 第二節 組織による正常で過剰な動員——組織という絶望
 終章 動員史観の基本的性格——総括
 第一節 基本的性格——動員史観の二つの顔
 第二節 ネオ・マキアヴェリ主義社会理論——フェイズ1とフェイズ2
 第三節 歴史社会学と動員史観
 あとがき——不眠症者のための動員史観
 付録——動員史観用語集

本の体裁としてはある種のハイブリッドである。序章の部分は、フランス象徴派の代表詩人マラルメの「リーブル（書物）論」からはなしを開始する。このような芸当（？）は、ある種の意図的な社会科学（要するに実証一点張りの社会科学や営業としての学問従事者）への搅乱をねらったものであろう。その点は評者にも興味深いが、不愉快に思う同業者は多いに違いない。その点のかなり考え方かれたと思われる挑発にいちいちつきあっていくといふ時間があっても終わりそうにないので、残念ながら割愛しなければならない。ご関心のある方は是非手にとって一読していただきたい。本書の最初から八つ目までの註は社会科学関係の文献ではないなど、随所に工夫（？）がこらされている。

第一部は、一般読者むけに書かれた雑誌連載を第一章に配し、動員史観への簡便な実例つきの導入となっている。たとえば森鷗外（最初のアダルト・チャイルドとして）や高度成長時の団地規格の歴史的背景（戦時動員の戦後の応用として2DKが成立する）、上海研修旅行での学生のふるまい（エビやカニを特別視しないという恐るべき態度！）など日常化した風景に近代的動員がどう

深くかかわるのかを、かなり面白可笑しく紹介している。しかし近代は「やがて悲しき云々……」といったものであり、一見の平穏さの底には悲壮な覚悟や受験勉強のような長期の努力、また一步間違えば脱落するとのおびえが存在する。ここに強固な自己規律の働くメカニズムがある。豊かな生活と髪一本の隔たりで失業やリストラ、転落やホームレスの危険が張り付いているのが近代だというのである。二一世紀初頭のわれわれの生き方に実は近代的動員の極端な姿が露呈している。

同じ第一部の第二章は、氏のゼミナールの学生の卒論である。これは氏なりの意欲的な試みである。学生たちは動員社会へのトバ口にある。その彼らがそこに今後うまく入っていきつつ、しかし完全にそれに飲み込まれるのでなく、それから距離をとることができるように知的構えを動員史観は教えようとしている。そのことが身についているかどうかがどうも氏の卒論指導の要諦のようである。サッカーの中田を扱いながら、彼がキング・カズなどと違ってそれまでの体育会系的なよい子人間を乗り越えようとしている点を評価する。近代的人間類型がカズだとすれば、中田は来るべきポストモダン的な人間類型を示すものとされる。サッカーにおける動員のかけ方などの究明を通じて中田的人間への意欲がみなぎっている。第二章がこの本では一番読みやすいとも思われるが、それは学生の力量がそれなりにあるというにとどまらず、動員史観が実践的教育的な指針ともなりうるし、明らかに氏がそれを意図しているということを示している。

しかし別の感想もないではない。氏は、工業製品のような規格品としての社会科学であるならば、ちょっとした学生なら誰でも書けると思っているのかもしれない。社会科学とはもっとテーマに細心の工夫をし、研究者の実存がかけられているべ

きものだということをこの章では言外に主張したいのではなかろうか、とも読めるのである。いずれにせよ学生の論文としては出色のものである。

続く第二部は、さきに述べた学問論が中心的に展開されているパートである。とくに第三章がその詳細な展開である。歴史的に規定された一九世紀型社会科学とは何か、そしてそれがどういう意味で近代と同伴者的視角を共有してきたかが暴かれる。前に述べたこととの重複をさけてその歴史的展望をいえば、ヨーロッパ中世の普遍世界が崩壊したときが近代の始まりである。文化や伝統によって地上的権力の膨張を抑制してきた均衡メカニズムがこわれ、その結果生じた秩序の混乱は、最終的にその領域内で絶対的な至上権をもつ主権国家——そうした統治形態は中世でも古代でも構想されたものではなかった。誰も予想しなかったような統治体なのである——によって回復されることになった。この中世から近代への変動はマルクス主義史学にいう「封建制から資本主義へ」の移行論では捉えきれない、と動員史観はみる。全般的な秩序の回復は経済的な形で達成されるわけではなく、もっと大きな政治的、体制的な形で決着せざるをえないと考えるべきだからである。

しかし主権国家は域内では平和を達成したが、しかし域間ではカントが「非社会的社會」と呼んだような、秩序調整の単一の焦点や機関をもたない関係をもたらした。伝統的な「帝国」システムをとらない限り、こうした半／反・秩序関係の成立を阻止する仕組みを近代はもたなかった。これを動員史観は「國際關係」と呼ぶのである。國際關係は二つの顔をもつ一個のヤヌスなのである。のみならず、いうまでもなく、國際關係は中世の崩壊によってはじめてヨーロッパ世界に成立した。つまり近代的現象だとみるのである。これは、朝貢関係を基礎とする非対照的な主体からなる東ア

ジア地域の関係とは抜本的に異なる。主権国家は形式上対等であるが故に、そこに形成される國際關係はつねに潜在的な戦争状態なのである。しかし中国を中心とする前近代の東アジアでは、そうした対等な関係としての國際關係なるものは成立しなかったのである。

主権国家の誕生、國際關係の成立、そして近代戦争の登場は同じ一つの現象である。それを動員史観は明確に近代と呼ぶ。動員史観の近代は、すぐれて政治的な現象なのである。そしてその近代の最大の特徴は、最終的には戦争という政治的決着を秩序のうちに内包しているということであり、この軍事的問題解決を軸として近代のあらゆる次元が形をなす。政治的というより、はっきりと軍事的近代を近代本体と考え、それ以外の要素はむしろ軍事的能力の増減にとってどうかという観点から評価されて生き残ったり消えていったと考える。つまり付属的要因なのだというのである。

たとえば資本主義——資本主義はその隆盛が財源の豊かさにつながり、国庫の豊かさが軍隊維持の基礎であった。そうである以上、産業や貿易の発展がしまいに国家のあり方を変容させるかもしれない不安はあっても、これを国家は容認せざるをえない。容認どころか、そのデリケートな機構を国家は積極的に支えていかざるをえない。そうしなければ国家自体が国際競争のなかで倒れていいくからである。こうした背景があって、はじめて国家と資本主義との運命的なランデブーが成立していくことになる。

同様に人民の暮らし振りもまた、はじめて統治者の関心対象になっていく。人民の体格や嗜好、生活習慣などが、個々の人民としてだけでなく、一定の集団としての人民、また最終的に領域全体を示す後の国民としても、歴史上独特に統治者の強烈な関心を引くことになる（それまで民衆は王

とはまったく別の世界を生きており、王の関心を引く対象ではなかった）。これも、彼らを軍人としてまた産業労働者として必要とする近代国家的優先順位の変化を示している。動員史観において、近代とは、一体となった領域全体が一つの運命共同体となって、他国からの関係に備える、そういう時代なのである。

こうしてもとに戻ると、動員史観は、この、戦争に結晶化される近代の中核的な特質を一九世紀型社会科学が理論的に取り込めていないとみる。そしてそれは、ややもすると近代を聖視しがちな近代社会科学が陥った視角の欠落によるとする（軍事的近代ではありませんいかという社会科学学者の嘆き！がその背景にあるだろう）。しかし歴史形成力としての近代戦争を理論的に取り込めない社会科学とは何か。それは近代とは何であったかを理解できないどころか、そもそも、それが半可通な理解を提示するために逆にその本質に覆いをかけるものではなかろうか。事実、一九世紀型社会科学は経済中心の一国史的アプローチに陥っているではないか。経済的変化を、歴史の大変動を説明する主たる要因とするのはあまりに一面的であるはずなのだ。だから経済学的説明への傾斜は歴史の全体の動きや性格を結果的に隠微してきたはずだと動員史観は主張する。戦争を機軸に既存の社会科学の体系全体をのりこえること——これが動員史観の考える二一世紀型社会科学なのである。

これは大変な問題提起であるが、確かに鋭い指摘に満ちている。のみならず非常に体系的に提示されるために、ただちに反論を構成することも困難である。この点は今後比較的長い時間をかけて個々の社会科学者が検討していくべきものだといえよう。

同じ第三部第四章は、これまでの社会科学のな

かで第三の社会理論に近づこうとした研究者たちの精神史的肖像に捧げられる。それは勿論整然とした学説史の形にはならない。第三の社会理論は生まれたばかりなのである（ただし二〇世紀への転換期においてドイツなどで現実主義とか国家主義と呼ばれた一群の学者たちがおり、ウェーバーもその一人だが、彼らの発想はその源泉となった）。したがって大半は分断しあい互いの存在にもほぼ無知である。そこでこれら絶海の孤島としての研究者たちに定期船的連絡をつけることがこの章では試みられる。とりあげられたのは順番に、歴史学者・文学者西川長夫、社会学者山之内靖、社会経済学者村上泰亮である。この三人の相互に孤立した試みが詳しく扱われ、イギリス経済史家川勝平太、政治思想・政治史家木村雅昭、経済学者野口悠紀雄がこれらに続く世代として紹介されている。多様な分野でいかに一九世紀型社会科学への反発が生じているかに留意して選ばれた顔ぶれであろうと思われるが、一方では学的領域——この専門分化も近代的領域国家の学問的アナロジーといえるのだが——に固執しているばかりの、動員史観のいう「修道院科学」者（科学史家トマス・クーンの「通常科学者」に匹敵する）は一人もない。強いてあげれば京大法学部教授木村がもっともオーソドックスなアカデミックなことになろうか。他方でとりあげられた人々は当該分野ではそれなり、というよりかなり名の通った研究者である。村上はとくにそうだろう。日本のウェーバーと呼ばれた人物である。しかし動員史観的な光をあてることで彼らの企図の隠れた側面が浮上する。一九世紀型社会科学の優等生としての彼ら的一面ではなく、二一世紀型社会科学へと飛翔するナイト・サイエンス（night science）的な背面である。この第四章もかなりスリリングであるが、こうして周到な準備を重ねながら、第三部に

入ることになる。

第三部が動員史観そのものの本体とその応用を扱う本書の中核部分である。動員史観の理論枠組が提示されるのは第五章である。その提示の仕方はいろいろ考えられたのであろうが、氏が選んだのは、山之内靖の総力戦論をバネにするやり方である。動員史観と山之内らのグループでなされている総力戦論には人的つながりもなければ影響関係もないという。しかし気づくとそこに大きな社会科学的視点の転換としての総力戦論が示されていた。長年の粘り強い知的前進によって山之内が得た総力戦論は事実、動員史観と大変よく似た構造と発想をもつ。そしてその試みは今では広く知れ渡っている。そこでその総力戦論を照準にして、動員史観を説明しようとするわけなのである。したがってこの部分は総力戦論の解説にもなっている。

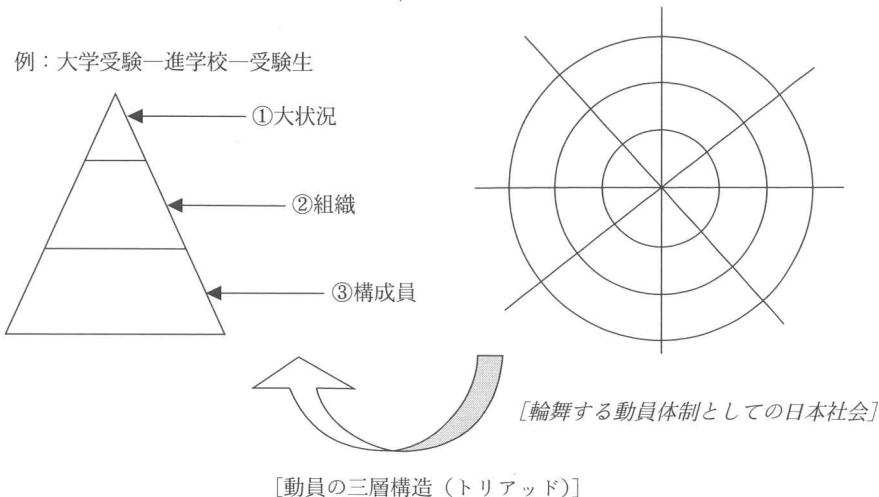
山之内的総力戦論は、二度の世界大戦が近代世界を現代世界に変えた、という点を強調する近代史再解釈のアプローチである。この近代史再解釈という点でも、戦争の軍事的インパクトを重視する点でも動員史観は総力戦論と通底している。山之内において現代世界は、近代社会が機能的により強化・再編された「システム社会」として定義される。この時代の社会学理論としてタルコット・パーソンズの意義が思想史的再解釈とともに興味深く打ち出されるが、そのことが示すように、近代世界の機能的障害が戦争合理化によって打破されたのが現代世界なのである。山之内は、近代社会が女性の二級市民化のようなものも含めて「階級社会」だとしており、戦争を媒介として現在見るような脱階級的で超合理的なシステムへと変容したと論ずる。

では動員史観と総力戦論との違いは何か。決定的な違いをいえば、もつタイムスパンの長さであ

ろう。またそれによって生じる近代観のズレにあるだろう。総力戦論はたしかに近代世界から現代世界への構造変化を説明するには大変魅力的である。しかし問題になるのはここでも戦争の位置づけである。総力戦論が中心的に考えている戦争とは総力戦である。それはそれで認めるとして、では近代戦争という概念はないのか？というのが動員史観の一番の疑問なのである。動員史観は近代500年（1492年のコロンブスのアメリカ発見や94年のイタリア戦争を起点に以後1992,3年までの援助交際の発見までの頑張る人間の隆盛と翳りの500年をユーモアたっぷりに近代と置いている）の流れを一つの視点から鳥瞰するものである。もっとも、無理やり500年としなくとも良いようには思われるが。

その結果、戦争一般でなく、まさに形式対等な主権国家同士の近代戦争にむけて、あらゆる事象が収斂していく様を動員史観はさまざまと眺めることになるのである。こうして近代世界全体が一個の軍事世界にみえてくるわけであり、一国内のみならず国際間でも軍事システムの優位が近代世界の特徴となると、考えるわけである。

要するに、よりタイムスパンを広くとり、近代についても近代主義的な理想的近代像を相対化していくことが動員史観の立場であって、そのことによって総力戦論との違いが出てくる。したがって動員史観では近代世界と現代世界との質的相違は強調されない。違わないとはいわないし、総力戦の決定的意義は認める。しかしその意義も、実は全体として近代全体にかかっていた圧力の二〇世紀版というべきであって、近代戦争の理論的意義は、総力戦そのものよりもはるかに大きいとみるのである。かくして軍事的近代が近代の本質であり、そのためのさまざまな動員こそが近代再解釈の要点となって浮かび上がってくる。



動員は社会のあらゆる領域を支配している。もの、自然、人、その行為、その思想などすべてに及ぶ。この動員の偏在性をうまく表現するのが、動員史観の理論枠組である。分かりやすいので、氏がある学会で報告したものから図を再掲しておこう（本書にはこの図はのっていない）。教育なら教育、経済なら経済と、近代的事象のあらゆる場面に近代的動員の同じ型が再現されているというのが動員史観の見方であって、これがこの理論枠組の要点である（日本法社会学会編『法の構築』[法社会学 58 号] 有斐閣、2003 年、176 頁）。

大状況（競争）—動員組織（効率的近代組織）—組織構成員（組織的人間類型）という実にシンプルな枠組ながら、汎用性は高い。たとえば教育なら大状況として激しい受験競争があり、それに対応すべく受験勉強に特化したいわゆる進学校が生まれ、そしてこの組織的要請に忠実な組織構成員としての受験生が発生する。経済でいえば市場競争、会社、企業人の三層構造である。しかしそうしたものはいずれも派生的であるとされる。根本的に重要なのは、国家的三層構造である（これを「原基的動員体制」という）。他の三層構造はすべてこの国家を機軸とする原型的三層構造の反復な

のだと動員史観は考える。すなわち、大状況の本質をなす競争の最大のものは戦争以外ではなく、近代という時代においてその最大の担い手的組織として主権国家が生き残り、さらにそれが勤勉で従順な国民という構成員を大規模に生んだ。すべてはこの構造によって震撼され、それが波及していくところに全体的なシステム変動として近代が誕生したのである。

歴史的にいえばこのような変動が最初に生じたのは、ヨーロッパ中世普遍世界の崩壊時である。あらゆる近代の芽はここにあったという意味では中世の崩壊こそ近代をたちあげる直接かつ最大の要因である。そこで動員史観はこれを理論上「原動員」と呼んでいる。原動員は、直接これを何かに特定することには動員史観は関心がない。歴史の起点を説明するある理論的な仮定として十分であると考えている。中世世界の崩壊がきたした混乱と混沌は最終的に主権国家と主権国家システム（=国際関係）によって安定したのである。中世崩壊後のアナーキー状況が原動員を生み、それが近代的解としての主権国家と主権国家システムによって回復された（そもそも歴史文献や歴史事象をふんだんに用いながらも動員史観は歴史学的で

はない。あくまで社会科学的な理論思考を追求していく点が氏の社会学者！たるゆえんであろう。）。

したがって「不思議発見」すべきなのは、動員史観においては、軍事システムとしてしか成立しなかった近代という時代なのであって、総力戦ではない。近代においては人間的解放や宗教的自由の獲得、伝統や因習からの解放などが進行し、さまざまな学芸が花開き、科学革命によって人類の技術的達成能力も抜群の高度を記録した。その力は月にまで達した。にもかかわらずその根底を、実は戦争とそのための恒常的かつ執拗な準備活動が支配していたとしたら？　動員史観は真顔でそうだといい、その具体例をさまざまにあげていくのが続く第六章である。

第六章は動員史観の理論枠組の応用でありその例証である。動員史観の一つの重要な関心はこの組織構成員の問題にある。この章は「よい子という問題構成」と題されている。「よい子」というのが動員史観なりの組織人間の印象的な言い換えであり、近代的人間類型である。よい子という言い方で分かる人には分かるはず、という動員史観なりの読者を選ぶ選択眼が働いている（それを傲慢と考える人とそうでない人が分かれるだろう）。分析対象は、よい子として人間形成される場に即して、家庭、学校、職場が順に扱われている。たとえば受験生という人間類型を扱った部分では、いかに受験生という、明日のために今日を我慢する人間が近代において成立したかが教育社会学の研究などにもとづいて示される。はじまりは明治中期であり、その大衆的波及は昭和40年代であった。開放された立身出世という近代的競争状況に適合する学校への白熱した受験と、その長期の勉強に耐えるような強靭な「頑張る主義」（社会学者大村英昭）的な受験生の成立。この教育的近代とパラレルに成立したのが、高度成長と日本的会

社とモーレツサラリーマンの経済的三層構造であったことは改めていうまでもないだろう。そこに同型の構図をみると容易である。

実例はつきないが、動員史観において、そうしたさまざまな領域に大まかに同じようなパターンが生じていることが示されていることが重要である。近代的動員はこうして近代の隅々までをあまねく侵食し、これに適合的でない組織や人間類型を駆逐していく。こうしてある種一元的な人間類型の浸透が指摘されなければならない。動員史観は、500年の長期的タイムスパンをもってこの現代の最先端の人間状況の、ある意味ウェーバー＝ニーチェ的な精神的破産（ウェーバー的には「精神なき専門人、心情のない享楽人」、ニーチェ的には「最後の人間」と呼ばれるところの）を、乾いた筆致で見詰める。こうして最終的に、第六章では、動員史観の関心が、社会科学が成立した段階でもっていた人間論的観点や関心をいまこの爛熟した専門分化の時代にもう一度取り戻そうとする。これは古くて新しい試みであるが、歴史的スパンの長い、明確な理論体系の構築によってそのことを遂行しようとするのが動員史観の特徴である。人間論的基礎を社会科学に改めて求める最新の試みが動員史観である（最近の同様の試みとして橋本努『社会科学の人間学——自由主義のプロジェクト』勁草書房、2002年などがある）。

3 動員史観の試みは成功しているか

この書評ではまず、現行の社会科学的状況を非常にマクロな視点、マクロな概念によって批判していく動員史観の基本的な立場を簡説した。ついで本書の全体構成を比較的詳しく述べた。勿論残された論点で興味深いものは尽きない。が、延々と論じていくわけにもいかず、ここで当初の問

に返りたい。本書の一九世紀型社会科学批判および二一世紀型社会科学への展望は成功しているからである。

ねらいの大きさからみて軽々しくその成否を論じることは慎まなければならない。分けて考えてみよう。

まず一九世紀型社会科学批判についてみて見よう。具体的に特定の思想家なり理論家なりに即して動員史観的な一九世紀型社会科学的偏向を指摘したものはこれまでにもあったと思われるが、一つの時代的類型として社会科学を丸ごとこうした批判的範疇に置くというのは考えてみれば思い切った見方であるが、そうすることで近代社会科学という営為が何をどういうふうに扱ってきたか、その際もっとも重視されたものが何であるかが鮮明になることは事実である。近代社会科学が単数であるか複数であるかは別にして、こうした見方で浮き上がる一本の太い線には、勿論例外が多数あるとしても、結局、社会科学が歴史形成力として経済における紛争、技術における革新などに焦点をあてがちであること（それも一国内部で作動するメカニズムとして）はその通りであろう。その反面、動員史観が強調する国際関係と軍事的国家的衝突という、よりマクロな文脈は見えざる背景に隠れてしまっている。もっとも決定的なマクロ要因としての「舞台」が視野から逃れ、それを前提に動く「舞台俳優たち」だけが脚光をあびるという構図である。勿論、経済的技術的領域の重要性は否定できないが、しかしやはりそのことへの一方的な注視のもつアンバランスを指摘する動員史観の主張には一理あるように思う。

次に二一世紀型社会科学への展望はどうか。そのことを考える前に注意を要するのは、一九世紀型社会科学を裏返せば、二一世紀型社会科学になるかということ、そうではないということである。

たんに一国的でなく（→したがって国際関係的）、社会経済的メカニズムにのみ偏重しない（→したがって軍事的政治的メカニズムを重視する）社会科学であっても、二一世紀型社会科学というには十分ではない。本書の構成をたどってみたところが示しているように、むしろ二一世紀型社会科学はある伝統的な社会科学の企図に忠実であろうとしている。つまり一九世紀型社会科学における例外的な巨人たち、またその創始者たちが意図していた事柄を改めて取り込もうとしているのである。それをさしあたり社会科学における人間論的基礎の明確化と呼ぶとすると、二一世紀型社会科学の一実践としての動員史観は現代社会と人間との関係を問うことをもって社会科学とみなし、歴史的存在としての人間のあり方に中心的な関心を寄せる、実証的だが無機的な社会科学がある種の退廃とみていることは明らかである。いわば官僚のレポートのようになってしまった社会科学こそ、社会科学の近代的伴奏者たる品質証明なのである。

これに対してたとえば左派的視点でいえばマルクスのいう疎外（自己喪失という意味での）、ルカーチの物象化、マルクーゼの一次元的人間などは、近代における人間性の頽落に焦点をあわせてきた社会科学であったはずである。また、まさに第三の社会理論の系譜として本書が名指す三人の知の巨人たち、ニーチェ、ウェーバー、フーコーにおいてもその営為における人間論的視点や批判が非常に強調されてきたはずなのである。すなわち、さきほど触れたようにニーチェにおける「最後の人間」論、フーコーの規律・訓練型人間論、そしてウェーバーにより提起された合理化のパラドクス論（「精神のない専門人、心情のない享楽人」批判）。

こうして二一世紀型社会科学は、たんに軍事=国際政治的要因を一面的に強調するものでなく、

そうした巨視的な背景が近代人の日々の行為や精神までも貫いて実現している、そういう時代としの近代理解をもったうえで、このような「時代診断」(ニーチェ的というよりブルクハルト的かもしれない)をその理論枠組に反映させて理論構築する必要を訴えるものなのである（勿論異なった時代判断によって人間について異なった見方をしていてもよい。要するに問題は、現実の人間的状況、その喜びと困難の双方を含めて、これをいかに社会科学のなかに復権するかにある）。このような文脈において動員史觀はおそらく二一世紀型社会科学的方向をめざす有力なパラダイム・チェンジの候補といえるだろう。

要約しよう。社会科学の具体的な作業にしばしば人間論が欠けていると繰り返し批判されてもう何十年たつだろ。にもかかわらず一向にその是正は行われず、批判の声は大きい。それはおそらくそうした人間論を踏まえた実証的な社会科学の理論枠組が提示されないというところに一因があつたはずである。そうであるなら長期の歴史的視点と今日的事象への批判的取組みという双頭的目配りのきいた動員史觀は、この陥穀を埋めるきわめて貴重な仕事というべきかもしれない。一言でいえば、動員史觀は歴史変動に関する政治学的マクロ理論とでもいるべきものである。いまウォーラースティンの世界システム論や川勝平太の海洋史觀など同じようなさまざまな動きの中で、軍事=國家論的視点を打ち出す唯一の試みが動員史觀である。氏のいう二一世紀型社会科学は今後一つの社会科学モデルの方向性を示唆するものではある。

おわりに

この書評のはじまりのところで、畠山氏は政治

学者だと述べた。それは氏が政治学科の教員であり、政治学や政治社会学を講じているからであり、訓練において政治学の門をくぐってきたからである。しかし本書で氏はどうも社会学者という、より一般的な呼称にこだわっているように見える。事実、自らを政治学者という規定をしているところは本書のなかにはない。中身からいってもそのように氏が自己呈示するのは十分理解できる。膨大な註のなかで政治学研究からの引用は最小限にとどめられている。これは意図的に行われたものであろう。

実証的政治学は国家という現象にアプローチするのに、社会科学の専門分化の要請に応じた役割を前提としたために、国家のもっとも重大な歴史形能力としての機能を見落とし、他の同じような現象と同じレベルの近代世界のワン・オブ・ゼムとして扱うことになった、と氏は考えているのであろう。国家の本質的な役割を見るには、実は国家の専門店である政治学というショップから、もっと自由な広場のようなところに出なくてはならない。その広場は氏の考える理想型としての社会科学以外にはないのである。分節化に抗する社会科学！　いうまでもなく、近代と同伴し近代的規定を受けたそれではなく、もっと近代から距離をとり、近代をその全体像において突き放すような社会科学である。もっとも評者の考えるそれとは少なからず異なるのであるが。そのような社会科学を動員史觀が二一世紀型社会科学と呼んだことはくり返すまでもない。距離をとらんがためにする必死の行いをユーモアと呼ぶ慣用にしたがうなら、まさに本書がなぜ随所にユーモアを意図的に導入しているかの理由もつく。それは気まぐれによるのではない。一九世紀型社会科学への戦略的「距離化」(社会学者エリヤス)の実践なのである。

本書にはこのような通り一遍の書評では汲み尽

せぬさまざまな知見が散りばめられている。もし この書評によっておののの関心が本書から多様な刺激を受けることができれば、評者にとって望外の幸せである。しかしこの書評では動員史観の理論的核心は説明したと思うし、二一世紀型社会科学のねらいについても本書の論述をさらに整理した形で提示できたと思う。ただ本書における氏の文章は、その博識ゆえにやや難解かつ回りくどく、そしてまた多くの引用や言い換えがないでは

ない。また、あまりにも正面からの社会科学批判によって、いわゆる「主流派」の政治学者や社会科学者たちの誤解や黙視に会うのではないかと危惧される。このようなささやかな書評が動員史観の大膽だが真摯なねらいを浮き彫りにできていることを願いたい。

(2003 年 5 月 26 日経済学会受理)